

# 佐渡の伝統文化を受け継ぐ小さな学校

小村小学校(羽茂) 大滝小学校(羽茂) 川茂小学校(赤泊)

編 集 部

佐渡の小さな小中学校では、地域住民の支援で「おんでこ」「能」「文弥人形」など伝統・芸能文化が子どもたちに受け継がれて来ました。ところが、大合併にともなって小さな学校が統廃合の対象とされ、こうした教育的価値のある地域に支えられた学校(今回訪問した小村小・大滝小)が消えようとしています。果たしてそれで良いのでしょうか。

## 「仕舞で子どもたちの感性を磨く」

— 小村小学校

小村地域は、ほとんどが兼業農家で、稲作のほか、柿、葉タバコ、椎茸などを営む。海辺に近いので、魚介類、海藻類を自家用・出荷用に採取。羽茂地区の「羽茂自然学園」(山村留学)の入園生を受け入れている。

120世帯のうち子どもがいる世帯は15世帯で全校生徒は19人(1年1人、2年2人、3年2人、4年5人、5年5人、6年4人)。近くに能舞台がある。羽茂の地域で演じていた能を、クラブ活動(生徒の希望)として10数年前から仕舞を取り入れる。末長万寿夫さん(教頭)、仕舞指導者の山田光子さんに聞く。

(1) 学校で取り上げたきっかけ

16年前、学校として、地域を生かした教育活動を行いたいと、学区に住む浜岡さん(山田さんの師匠)に能の指導を申し入れる。当時能管を吹く音楽の先生がおられ、一緒に子どもの指導にあたっていた。山田さんが担当して5年になる。佐渡の小学校として取り組んでいるのはここだけである。

子どもたちに教える仕舞（演目のクライマックス部分Ⅱ能の一番良い部分を、地謡だけで演ずる）は、3分間くらいで舞囃子は20分くらいである。謡（地謡）は3年生から始めている。3〜5年生が謡の時は6年生が舞い、5年生が舞う時は3・4・6年生が謡う。冬の間12月から週1回、1時間、常に2曲練習をする。毎年3月に羽茂地区の芸能発表会が行われ、芸能発表会は、1日とって、羽茂の神社に伝わる能と一緒に披露する。また、6月の羽茂祭には、地元の草刈り神社で薪能が開催され、ここにも参加する。

本年の能楽発表会の時は、学校とは別に二段レベルの高い演目の「鶴亀」を演ずるので、夜（8〜10時頃）、大人の稽古に入って子方の練習をしている。子どもたちは積極的に、6月に相川、9月に羽茂で能が行われたとき、子方を演ずる人の希望をとつたら6年生4人の内2人も立候補し、オーディションを受けさせてくれと申し出るほどであった。

学校統合で3月の芸能発表会が最後になるのでこれまでの成果を披露する。

(2) よく分からない謡をどう指導するか  
能の「仕舞本」（全10巻）の1巻から謳いやすく、短

いものから選んでいく。演目の内容を説明しながら、万葉仮名の謡には、分かるように文字を大きくして「ふりがな」を付けた楽譜を教師が全員に渡す。黒板にも大洋紙に書いて貼る。声を上げる、下げる、延ばすはその都度指導する。

大勢座つて声を揃える地謡は高学年の5・6年生が中心となり、中学年をリードする。

(3) 子どもの理解はどうか

舞の足のはこび方には決まりがあるので、最初手本を示しながら、所作の不具合のときは、その都度指摘するので子どもは覚えるのが早い。後からの指導はうまくいかない。

例えば「胡蝶」では、花の都を見物しようとして上京した僧が花の下陰で仮寝していると、夢に現れた胡蝶の精が梅花と僧と縁を得たことを喜び、花にとびかう舞を舞う時の、気分のうきうきした所作は、大人よりうまい。また、「羽衣」の天人が空を舞う所作、「鶴亀」の威厳のある皇帝の所作（下を向かない、エリを糺す）なども説明すると、すぐ理解してこなしてしまう。

大人は能は難しいものという先入観があつて頭で覚えようとするが（山田さんはイメージで覚える）、子ど

もは、先入観がないため、身体に素直に入り、覚えが早い。子どもの感性に響くのだという。

「狂言」の野村万之丞は佐渡公演で、「稽古」は子どもは勉強と両立させながら練習できるので覚えは早い。大人は仕事をしながらの練習でなかなか上手にならない」と言われた。

「袴」などの衣装は当日「能の会」から借り、着物は保護者が自宅から持参する。扇などの道具は寄附を受け学校に揃えてある。教師、保護者は、発表のとき、子どもの着付けなど手伝う。

これまで「鶴亀」「胡蝶」「葛城」「羽衣」「草紙洗」の演目を演じてきた。

子どもたちは感想で「演じて楽しいことは昔の人になつたみたいなとき、ことばも段々分かってきた」と述べ、演ずることの喜びを身体で感じている。

#### (4) 今後の抱負は

中学校のクラブ活動で取り上げて欲しいと中学校長にお願いした。生徒に希望をとつたら、応募がなかったという。中学校は舞囃子、高校生は3年くらいで能を舞うことが出来るのだが、学校生活は忙しく時間が無い。やってみたい生徒に是非続けて欲しいと望んでいる。

「羽茂地区では、この一月から希望者に土曜日の午後公民館で指導している」(後日談)。

#### 地場産トビウオの「あごだし」と

#### そばづくりで村を元気に——大滝小学校

大滝小学校は、羽茂大崎地区に位置し、中山間地域である。大崎のそばが全国的に有名になり予約するツアー客が増え、転作農地と遊休農地へのそばの作付けが増加している。そばを始めとする食文化と郷土芸能文化(文弥人形芝居)が定着している。

全校生徒12人(1年1人、2年1人、3年3人、4年1人、5年3人、6年3人)の複式3学級編成。

1・2年生はそば作り(生活科)、総合的学習時間に3・4年生は柿作り、5・6年生は稲づくりを、そして全校児童で、そば打ち、あごだしづくりを実施してきた。いずれの体験学習も作物の管理も保護者や地域の祖父母が支援している。ここでは、村の活性化にもつなげている「あごだし」について、亀山浩(教頭)さんと「あごだし」指導者外山正則さんに聞く。

#### (1) 「あごだし」の作り方の指導

地元で獲れる最高級のトビウオは、アイナメがおでん

の出汁に合うように、そばの出汁として最適である。トビウオの使用量は200匹くらい。でき上がった出汁はそのまま、醤油を入れ椎茸などと一緒に煮込んで使う。「あごだし」の作り方は、ウロコをとる―開かずの内臓のみを取り出す―頭を落とす―洗う―竹串に刺し、置き火（炭火）で焼く―網に入れ天日干し（2〜3日）―さらに火で乾燥する、という作業工程で仕上げる（仕上げた「あごだし」は茶の箱など外側と遮断できる容器に保存する。賞味期限は1年以内）。

最初に、子どもたちに包丁の使い方を説明し、「包丁は下向きにして持つ、絶対に振り回さない」ことを徹底的に教え込む。無論、包丁は事前に良く切れるように研いでおく。ヌルヌルするので、手で魚を押さえるポイントを教える。これまで、6年間指導してきたが、今まで切り傷を負った子どもはいない。1年から6年まで、魚のさばき方を教えるが、3年生くらいになると安心して見ていられる。

## （2）何故、学校で教えるか

学校で「あごだし」を指導して20数年経つ。この地域は昔からトビウオを使った「あごだし」は伝統となっており、素朴な手ほどきを伝えたいという思いと、ふるさと

の良さを伝えたいという思いから始まった活動である。また、子どもの数が少ないため、地域の人が協力しないと学校行事が成り立たない。これまで、柿作り、米作り、野菜作り、そば作り、そば打ちなどに地域住民がこぞって協力してきた。テレビなどにも取り上げられ、全国的に知られるようになった。

しかし、閉校前の忙しさや複式解消のための時数確保、新学習指導要領に伴う総合的学習の時間の縮減によりこれらの行事が少なくなり、09年度はそば作りと、そのだし汁としての「あごだし」のみとなった。子どもが活動に追われるようでは困ると考えたからだという。

## （3）子どもたちの反応

魚の内臓を取り出すときなど、いやがらず、おっかないとか汚いなどという子はいない。

子どもたちが戸惑うのは、トビウオの焼き上がりである。強火で焼くと皮だけ焦げ、中味が乾かず火の加減が面倒で、その見極めがつかないことだ。焼き上がりの状態を常に子どもたちは聞きに来る。子どもたちが一番喜ぶのは、焼き損じたあごだしを食べることや、包丁で魚を上手にさばいたときである。先生方も面倒くさがらず、それどころかハチマキをしながら教

頭・校長は張り切る。

学校の感謝の気持ちを表す「大滝小そばの会」では、全校生徒で育てたそばを打ち、仕上げた「あごだし」を使って地域の方々と一緒にそばを食べる。「あごだし」は佐渡全体でも実施しているが、そばのだし汁作りを学校で行うのは大滝小だけのようだ。

(4) これからのこと

羽茂小学校と統合後はこの「あごだし」の行事はなくなるかもしれない。特色ある教育活動を残すべく模索中とのこと、そして地元ではこれからの地域の活性化をどう実現していくか、熱く語り合っている。

「あごだし」指導者外山さんは、「子どもの声が聞こえなくなり、子どもと出会うことが少なくなると、村の活気がなくなり、寂しくなる。これからは、今までやってきたことができなくなり、自分たちの声・地域の声は、PTAの段階で止まってしまい、学校に届かなくなるのが心配だ」という。

「ふるさとの自然と文化を発見し、語り継ぐ」

— 川茂小学校

川茂地区は赤泊地区の北部、小佐渡山脈に位置する。

盆地上の谷底平野で赤泊の穀倉地帯。全校生徒17名

(1年5人、2年0人、3年3人、4年3人、5年3人、6年3人)。1・2、3・4、5・6学年の複式学級で算数および1・2年の国語教科を除き、A・B年度方式の指導計画で編成。各学年のとりくみは、総合的な学習の時間(年間95〜110時間)で行う。

○祖父母が教える行事食(配当時間28)：3・4学年(A年度)

川茂に残る地域や家庭の行事を調べ、お年寄りに地元行事食「タイヨウゴロウ」「ヨモギダ、ンゴ」、木型を使ったしんこ細工の作り方を教えてもらう。伝統食を伝えてくれる場合は、お年寄りと一緒に過(す)交流の場となっている。お年寄りはいきいきと子どもたちに教え、生きがいを感じており、元気が出てくる。

○羽茂川を探検(配当時間35)：3・4学年(B年度)

小佐渡山脈から日本海にそそぐ羽茂川の上流から下流にかけ、生きもの調査(生きものを採って名前を確かめ、どんな汚れのところに住む生物かを調べる)、水質検査(水を採取してバックテストを行い、透明度を見る)を行い、海に出る所まで探検する山と平野と川のつながりを学ぶ。そして、水を守るために自分たちが

できることを考える。

○トキの住める佐渡を目指してーピオトープづくり  
(配当時間35) : : 5・6学年

この4月まで、佐渡の保護センターから放鳥されたトキが、学校の近くの田んぼにしばらく居着いた。トキの休息場やねぐらを観察する機会となり、トキとの共生という環境問題を考えるよい契機となった。

近くに住む人が休耕田の荒地地を利用してトキの餌場用にピオトープを作った。これを見た子どもたちが、動植物に興味を持ち、そこに棲む生物を採取し、調べた。生物の好む環境を調べ、ピオトープづくりを始めた。

○民話劇を演ずる (配当時間30) : : 全学年

隣の赤泊地区は民話の里である。この赤泊のプロの語り部から佐渡の民話・伝承語りを聞き、演じやすくするため、自分たちで民話劇の台本に修正を加え、台本を組み替えて脚本をつくる。小道具は基本的に自分たちでつくり、舞台に間に合わないときは、以前使ったものを利用する。練習の成果は、年に2回ほど赤泊「演劇研究会」の方々に見て貰い、指導を受けている。3年生から6年生まで一緒に一つの民話劇を文化祭

(11月上旬)で発表し、6年間で6つの演目を演じる(過去6ヶ年の演目ー「天狗塚の天狗」「おんでこ」「川茂の太郎杉」「腰細の犬」「爪の沢蝶ねえ」「八専三郎土川五郎」)。

子どもたちの反応は、民話劇を自分たちはやるものと積極的に受け止めているので定着しており、恥かしくて、自分をたすことの苦手な子どもには、大きな声を出し、動きを大きく演ずることの大切さを教えるので、そこで自分の表現方法を学ぶ機会となる。

他に、椎茸栽培の盛んな地域なので6年生は椎茸の駒打ち、また、バケツ稲栽培を地域の指導者から教えてもらう。このようなとりくみをとおしてふるさとを愛する心を育てている。

付記：この取材には境野健兒(福島大学)、現地当研究所会員の菊地一郎・中川直美・上杉俊孝および自治体研究所の佐々木秀昭各氏に協力をいただいた。

(文責・内山雄平)